小学校　図画工作科　部会

部会長	中津原小学校	校長	村上奈美代
実践者	大任小学校	教諭	桑野　由佳

１．研究主題　　「確かな学力向上をめざす図画工作科学習指導のあり方」
～感性を働かせ、つくりだす喜びを味わう活動を通して～

２，主題設定の理由

（１）現代社会の要請から

現代社会は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる地域での活動を基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われている。このような「知識基盤社会」やグローバル化は、国際競争を加速させる一方で異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性を増大させている。このような現代社会において、人が生きていく上で身につけておくべき、欠くことのできない能力がある。自分を表現したり、友人や様々な人々の表現を見取ったりしていくという高度なコミュニケーションこそが最も大切な能力といえる。他とかかわり、感性を働かせながら自分なりの判断をすることは、そのまま「確かな学力」をつけるための「思考力・判断力・表現力」の育成につながるものである。そういう意味では図画工作の実践は、児童の人間形成に重要な働きをしていると考えられる。

（２）図画工作科の目標から

図画工作科のねらいは「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」ことである。造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、生活や社会と主体的にかかわる態度を育て、豊かな情操を養う視点に立って、児童一人一人のかけがえのない価値観をそれぞれの自己実現という形で形成していくことがねらいである。形や色などの特徴をとらえたり、イメージをもったりする能力は、自分の思いを作品に表したり、他者の作品や表現を理解したりすることの基本であり、広くコミュニケーションしていく力の基になるものである。よって、題材に対して感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わわせる活動を取り組むことは意義深い。

（３）児童の実態から

児童は幼い頃から、身近なものや人とふれあいながら生きている。自分の感覚や行為を手がかりに自ら働きかけたり、周りから働きかけたりされながら成長していく。造形的な面からとらえれば、地面や紙などに形を描いて意味づけしたり、身近な材料を組み立てたりするなどの活動である。そこでは、見たり感じたりする力、次にどのような形にするかを考える力、それを実現するために表現方法を工夫する力が働いている。しかし、現在児童を取りまく社会の中では、外で遊ぶことが減り、屋内での遊びもゲーム機など既成の玩具で遊ぶことが大半を占めるようになっている。自然をいろいろな物に見

立てて遊びを考えたり、身近な材料を組み立てる経験をしたりすることは少なくなってきているのが現状である。そこで図画工作科の学習の中で、感性を働かせ、つくりだす喜びを味わわせる活動を取り組むことは、見たり感じたりする力、造形するために考えたり工夫したりする力を育むうえで重要であると考える。

３．主題の意味

○　図画工作科における確かな学力とは

図画工作科では「つくりだす喜び」は知識・技能を習得し、活用していこうとする意欲でもあり、つくりあげたあとの達成感と次の活動への意欲でもある。活動の中で、自分のイメージしたものを表そうと試していく過程では習得と活用は一体化しているといえる。また、「生活や社会と主体的にかかわる態度」を育てることは、図画工作科で学んだことを生活や社会のために活用することである。このように「意欲・習得・活用」の学力の要素が目と手と頭を使って活動の中で一体化していることが図画工作科の「学力」の特色である。教師は「確かな学力」をつけるためにどのような活動を提案するか、その活動によって児童がどのような力をつけていくのか十分考えることが重要である。その活動に児童が心から魅力を感じ、表現や鑑賞への意欲をかきたてられることがあれば、児童は自分の思いに沿って、イメージを実現するように試行錯誤を重ねていくと考えられる。このような学習活動を行っていくことで「確かな学力」は向上していくと考える。

４．研究の目標

確かな学力向上をめざすために、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わう学習活動のあり方を究明する。

５．研究仮説

図画工作科における学力向上を図るために、以下のような手だてをとれば、児童は感性を働かせながら意欲的に活動し、つくりだす喜びを味わうことができるであろう。

（１）児童の興味・関心に合った題材を設定する。

（２）発想が多用に広がるような材料を紹介し、発想を形にする例示を行う。

（３）お互いのよさに気づく鑑賞活動を設定する。

６．研究の計画(授業の計画)

（１）題材　「３年１組こびとづかんをつくろう」

（２）題材の目標及び指導計画

題材	３年１組こびとづかんをつくろう	総時数５時間	１１月
題材目標	○身の回りの材料を組み合わせていろいろなつくり方を試みながら、「こびと」をつくることをたのしむ。（関心・意欲・態度） ○身の回りの材料を組み合わせながら発想を広げて、つくりたい「こびと」を考える。（発想・構想） ○自分のイメージをもとに、材料の特徴を生かして「こびと」をつくることができる。（創造的な技能） ○自分や友だちの作品のよさを関心をもってみる。（鑑賞の能力）		
授業計画	学習活動・内容	指導上の留意点	
第１時	１．つくってみたい「こびと」を想像し、イラストにあらわす。	・「こびと大百科」を提示し、学校の中にどんな「こびと」がいたらおもしろいか考えさせる。 ・イラストにあらわすことで、どんな材料が必要か計画を立てさせる。	
第２時 第３時	２．集めた材料を組み合わせて、いろいろなつくり方を試みながら、「こびと」をつくる。	・教師が準備した紙粘土、段ボールなどを使ってよいことや友だちどうしで材料を交換してよいことを伝え、材料の幅が広がるようにする。 ・児童の作品の中から、試みのおもしろさ美しさを見つけ、活動のよさをほめる。 ・接着の仕方など、とまどっている児童には個別に支援する。	
第４時	３．できた「こびと」を写真に撮り、説明書きを加え、「こびとづかん」を完成させる。	・自分のつくった「こびと」の生息地や特徴を文であらわさせる。 ・「こびと」の特徴については自由に発想させ、たのしみながら表現させるようにする。	
第５時	４．友だちの作品を見て、工夫しているところやおもしろいところを発表し合う。	・お互いの作品を見たり、できあがった「こびとづかん」を回し読みしたりさせながら、それぞれのよさに気づかせる。	

７．指導の実際

本単元の指導にあたっては、児童に大人気の「こびと大百科」を提示し、３年１組の「こびとづかん」をつくろうと提起した。ペットボトルのふた、クリップ、木の棒など身の回りにある小さな材料を用いて想像上の「こびと」をつくることは、児童の興味・関心に合っており、意欲的に取り組むことができると考えた。

【第１時】

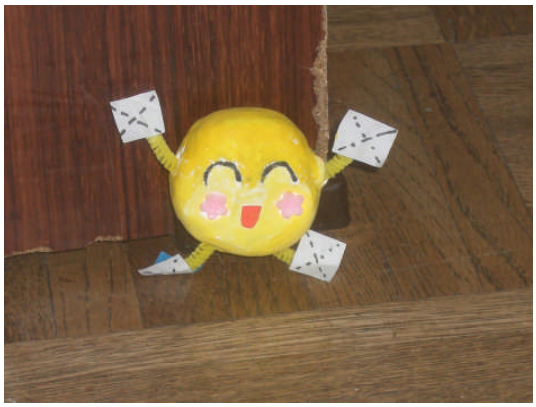
本題材の導入では、人気の児童書「こびと大百科」を見せ、大任小学校に生息している「こびと」を想像してつくり、３年１組の「こびとづかん」をつくろうと提起した。学校のいろいろな場所に住む「こびと」を想像し、学習カードにイラストを描かせた。「こびと大百科」を提示したことで、児童の意欲を喚起することができた。下絵に表した後、どんな材料を使えばできそうか考えさせたが、なかなか想像できない児童がいた。ペットボトルのふたやせんたくばさみ、モールなど材料になりそうな物を教師が用意して見せたのは、役に立った。

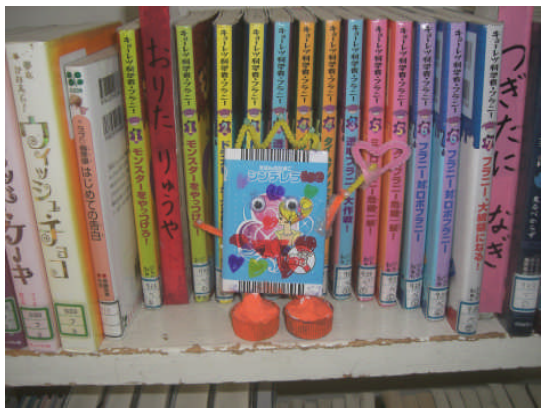
【第２・３時】

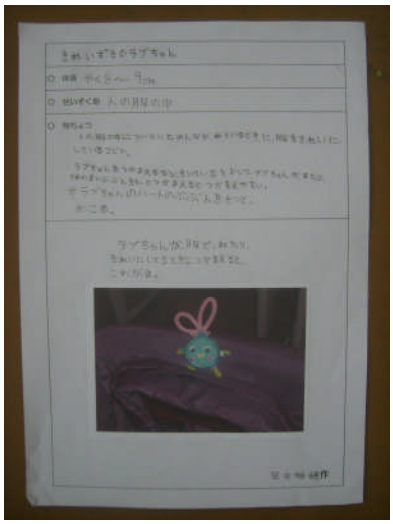
自分で考えた「こびと」を持ってきた材料を組み合わせてつくった。まず、どんな材料を集めたか見せ合い、お互いに交換したり、教師から紙粘土やモールをもらったりしてもよいことを確認した。集めた材料を交換し合うことで材料の幅が広がり、少しの材料しか持ってこられなかった児童も進んで作品づくりに取り組むことができた。接着剤には、児童が持っているのりに加え、セロハンテープと速乾ボンドを用意した。接着の仕方にとまどっている児童には、個別指導を行った。作品が仕上がった児童には、２つめ、３つめをつくってよいことを知らせた。１つ１つの作品は、手のひらサイズであるが、形を工夫して最後まで集中して仕上げることができた。

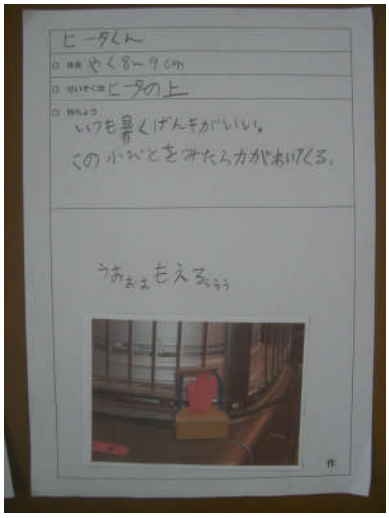
【第４時】

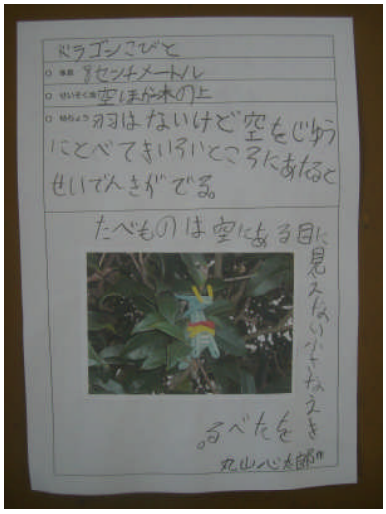
できあがった「こびと」を本棚や運動場の木の上など思い思いの場所に置き、写真を撮った。児童はできた写真を見てとても喜んだ。その写真をカードにはり「こびと」の名前、体長、生息地、特徴を書き込み「こびとづかん」を仕上げた。











【第５時】

友だちのつくった「こびとづかん」をみて、おもしろいと思ったことを発表し合った。形のおもしろさ、材料のおもしろさ、設定のおもしろさなど多面的におもしろさを感じることができた。また、仕上がった「３年１組こびとづかん」を学級文庫に加えたことで児童はとても満足した。

８．成果と課題

成果

○　児童にとって興味・関心のある題材であったので、１時間１時間最後まで意欲的に取り組むことができた。自分の思いを形にしようとして、何度も考えたりつくったりして納得がいくまでがんばる姿が見られた。

○　身の回りの物が材料になることを作品例示したことで、実際にどんな物を集めたらよいか理解できた。売られているモールやビーズの他にペットボトルのふたや小枝など自分のつくりたい物に合わせて材料を集めてくることができた。

○　できあがった「こびと」の作品を生息すると考えた思い思いの場所で写真を撮ったことで想像が広がった。その結果、鑑賞の際に形のおもしろさ以外に、材料のおもしろさや設定のおもしろさに気づくことができた。

課題

●　材料集めについては、２～３週間前から声をかけるとよかった。実際には、たくさん集まった児童と集まらなかった児童の差がついた。２～３週間前から予告しておいたら、途中でどんな物を集めたか互いに見せ合うことができ、さらに収集の視点を確かめながら活動に入ることができたと思う。

●　立体的に接着することが児童にとって、なかなか難しかった。速乾性のボンドを準備したがそれでもすぐには付かないので材料と材料を短時間で接着するためには、グルーガンを準備したほうがよかった。

参考文献

小学校学習指導要領解説　図画工作編　　文部科学省

学習指導要領の解説と展開　図画工作編　　安彦忠彦　監修
藤江充・三澤一実　編著　教育出版

こだわりを生む楽しい造形活動３つのポイント　佐々木真治著　学事出版

こびと大百科　なばたとしたか作　長崎出版

こびとづかん　なばたとしたか作　長崎出版